

— 後藤和民元館長追悼特集 —

後 藤 さ ん の こ と

青 沼 道 文

2010年11月4日加曽利貝塚博物館は、開館以来45年目に入った。開館当時の1966年頃、周辺は人家もまばらで畑と雑木林が広がる牧歌的な風景の中の遺跡であり博物館だったと記憶する。

この年の4月私は高等学校に入学し、考古学のサークルに勧誘され、造成中の千城台団地の一角で発掘調査に参加していた。周囲はむき出しになった関東ローム層の丘陵が延々と広がり、春風によって赤土の砂塵が巻き上げられていた。そんな中、壊滅間際の蕨立貝塚の調査に携わっていた。当時千葉市は工業地帯や大型団地建設等、大きな開発の波に飲み込まれていた。幸いにして加曽利貝塚は、全国規模の保存運動の結果、破壊の危機を免れ、博物館開館に向けての準備の大変に忙しい時期にあった。発掘の余暇に完成間近の加曽利貝塚博物館を見学した。建物はほぼ完成し、外観整備と展示作業が急ピッチで進められており、案内して下さったのが後藤さんであった。これが後藤さんとの最初の出会い、加曽利貝塚をはじめ、館内の説明と展示の話をして下さった。まだまだ考古学への興味というよりも、発掘にはまりつつあった高校生には難解な説明であったが、引き込まれるような熱意が感じられた。むしろ見るからに厳つく、ライオンのような風貌が強い印象として残った。後藤さんの加曽利貝塚に対する一方ならぬ思いと、保護への強い信念、展示への情熱を理解するのは、だいぶ後になってのことだったと思う。また、この時にはまさか後年一緒に職場で働く日が来るなどとは知る由もなかった。

2009年7月冷夏と言われた夏の中でも、蒸し暑い日の昼日中、帽子を目深にかぶり散歩の途中だとおっしゃり、博物館にお訪ねいただいた。その年2月博物館友の会が主催したシンポジウムには所用で参加することができなかった。数年前学生を何人か連れて、埋蔵文化財調査センター見学の際に、偶然お目にかかって以来久しぶりの再会であった。幾分お痩せになったようにお見受けしたが、豊饒としておられた。11月まさかの訃報、驚きとともに後藤さんと仕事をした日々、千葉市の文化財行政の変遷、私自身の市職としての30数年が去来した。

1973年大学を卒業後千葉市に職を得た私は、教育委員会社会教育課、設置2年目の文化係に配属され、開発事前の埋蔵文化財調査に忙殺されることとなった。当時の博物館も多忙を極めていたようで、いろいろな噂が飛び交ったりもしていた。本冊紙「貝塚博物館紀要」は創刊されたばかり、1964年の南貝塚大発掘、博物館開館以降の北貝塚の野外施設建設に係る調査、南貝塚東傾斜面の調査他、開発事前調査に係る整理報告書の作成業務が、一時に集中してしまい大変だったようだ。後藤さんはこの後、6年間博物館に勤務。開館準備から12年の歳月を博物館業務に心血を注いだことになる。この間、展示業務は勿論のこと、従来の環状貝塚論を覆す新たな貝塚集落の概念を提示し、野外博物館という新境地を開拓し、一方では陶芸家新井司郎氏を招聘して、現在では全国的に普及している縄文土器づくりの先駆けとなった縄文土器の製作技術研究を始められた。これらのほかに市制50周年の市史編纂事業、更には、文化財担当係開設以前においては、開発に伴う埋蔵文化財調査にまで任を負っておられた。今にして思うと大変なことだった様子を、改めてうかがい知るところである。

1978年社会教育課から文化課が独立すると、市の史跡整備策定の特命を負って着任、翌年史跡整備計画策定の委員会を立ち上げ、年度末には「史跡整備の現状と課題」を上梓した。82年には「千葉市史跡整備基本構想」及び「史跡整備の方法―縄文貝塚の整備―」、85年「千葉市史跡整備基本計画」を編集・執筆している。これらに基づいて「史跡加曽利南貝塚整備基本計画」を策定して、1987年加曽利南貝塚の整備に伴う予備調査を開始した。はじめに地下レーダーによる貝層範囲の把握を行い、翌年には坂月川河畔の泥炭層の花粉分析を行い、その結果から縄文時代の植生を復原する野外展示を行う。また、南貝塚の貝層断面観覧施設の建設に向けての調査、復原集落のための竪穴住居の建設等々、着実に実績を重ねていた。その間には、1989年に竣工した千葉市埋蔵文化財調査センター開設についても調査・計画から設計・建設まで関り、完成に至らしめた。加曽利貝塚、犢橋貝塚・荒屋敷貝塚・月ノ木貝塚の史跡指定、用地の公有地化にも大きく関わった。要所では常に私に声をかけて下さった。南貝塚の史跡整備の際には、石川県チカモリ遺跡・真脇遺跡の整備状況の視察に、埋蔵文化財調査センターの建設に当たっては、財団法人大阪文化財センター（現 財団法人大阪府文化財センター）・福岡市埋蔵文化財センターへの調査に同行させていただいた。いずれもなかなかの珍道中で、思い出として残っているが、その逸話を記す場ではないようだ。加曽利貝塚博物館、文化課でのそれぞれの12年間、あまりにも先進的な思考、多少強引とも思われる実行力、少なからず摩擦がなかったとはいえないが、現在にして尚、斬新な試みが、今の私たちの活動の基盤となり生き続けている。業績の一端を羅列してきたにすぎないが、とても表記しきれるものではなく、申し訳なく思う。

後藤さんの26年に及ぶ千葉市での公務員生活、最後の2年間は加曽利貝塚博物館の館長として勤務された。この時期私は学芸係長としてご一緒させていただいた。千葉市は政令指定都市に移行する直前で、加曽利貝塚の整備計画について議論する機会も多かった。緑政課の「縄文の森」構想の発進間近であるような雰囲気の中で、博物館の新館あるいは貝塚の整備はどうするのか、近未来の夢を描いていた。まさか市の財政が現在のようになるとは思わず、それなりに真剣に取り組んでいた。そんな中、新館構想実現の一環として全国の貝塚資料集積のための企画展を立ち上げ、世界の貝塚の情報を集めるために考古学講座を開設した。加曽利貝塚をより多くの市民に周知するために、体験学習を目的とする「縄文フェスティバル」を始めたのもその頃である。私自身学ぶことの多かった充実の2年間であった。

定年退職された後には、創価大学教育学部教授に就任され、学校での講義に、講演会で、また著作の中で、常に加曽利貝塚のことを考え、周知・普及・啓蒙に尽くされた。

最後にお会いしたあの夏の日「君が博物館へ戻ってくれてよかった」との言葉を頂いた。退職後、後藤さんは私たちに何を求めていたのか、多く語らなかったが心に浸みるものがあった。45年前の後藤さんの展示は、いまだに大きく手を加えられることなく生き続けている。後藤さんの心中を推し量ると、複雑な思いもよぎる。私自身この春には定年退職、短かった博物館での在任期間、これと言って残すものがなかったことが、心残りではあるが…。

今、「加曽利貝塚を特別史跡へ」のプロジェクトが動き出そうとしている。これから先、加曽利貝塚を守り、次代へ伝える仲間がいる。後藤さんの業績を理解し、意思は受け継がれているはず。最後まで現役の考古学者として、生涯の過半を加曽利貝塚に傾注された後藤さん、ありがとうございました。遠い天空のもといつまでも見守ってください。加曽利貝塚を…

合掌

（加曽利貝塚博物館 館長）